

「油一」テールベルト

開発期間六年、の絵具。

始まりは六年前でした。私たちがホルベイン工業と東京芸術大学油画技法材料研究科の思いが共鳴し、画家の感性に根ざした油絵具とはどういうものなのかを探る、いわば「理想的な油絵具」を開発する長い長い旅が始まったのです。

ただ、理想の絵具とひとことでもいっても、実際にはどういうものか。つまり「理想の定義」が必要でした。使う側にも好みがあり、作る側にも理想がある。その狭間で理想を見つげるために私たちは気が遠くなるほどの項目を試験していきました。同じ色を筆で塗る、ペインティングナイフで厚く塗る、また薄く引き延ば

え、また生まれ、次第に現在の既製品にはないコンセプトによる油絵具が形になっていきました。

最終的に、まず発色がよく鮮やかで、肌理が細かく粘着性が高く、純度の高い顔料を使用して着色力も高い。そんな理想の油絵具30色がついに完成することになったのです。

※「油一」(全30色)は、藝大アートプラザのみで販売中。問合せ先/藝大アートプラザ 東京都台東区上野公園内12-8 東京芸術大学内 TEL 050(5525)2102

holbein

ホルベイン工業株式会社
東京都豊島区東池袋2-18-4
TEL.03(3983)9251
大阪府東大阪市上小阪1-3-20
TEL.06(6723)1554
www.holbein-works.co.jp

◎「油一」が、2007年度グッドデザイン賞を受賞しました。

holbein

与那覇大智

鷹見明彦 || 文 森田兼次 || 写真* ||
水平線を見おろす視点と〈光の匂ひ〉



1992年、沖縄・玉城村百名のビーチにて。150号の額縁のみを並べて、《銚子の海》と名づけた。別な場所の名前を付けてみたのは、フレームによって切り取られる海の匿名性に絵画の虚構性を重ねて示したかったから



ドア 1990 紙に鉛筆、顔料
78.8×109cm

1990

「油絵に行きづまって、苦し紛れに鉛筆で
取り壊された沖縄の家のドアを描きました」

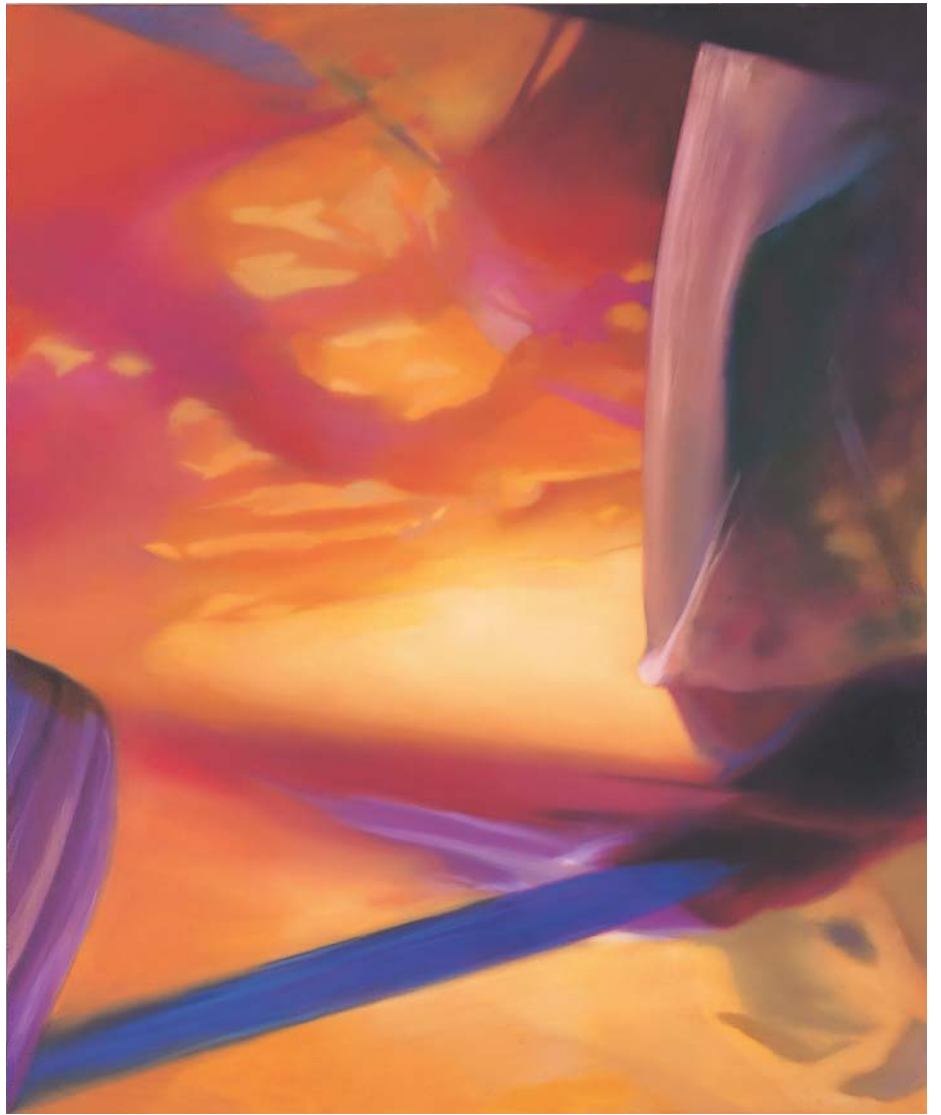
那覇から海沿いに車で北上する

と、やがて国道の風景にフェンスで囲われた場所が混じり、米軍相手の店のサインが眼につくようになる。沖縄県宜野湾市。画家が少年期を過ごしたという町の公園が、待ち合わせ場所だった。市民公園の緑陰には、羽衣の天女伝説がある森の拝所が、湧水の遺構として残っている。そこからソテツやガジュマルの樹が植えられた斜面をのぼっていくと、広い高台の芝地になる。

「あのフェンスの向こうは米軍の普天間飛行場です」。長い金網の向こう、飛行場の端は、無人の舗装道が見えるだけで不気味な爆音が断続的に轟いている。

「よくここへ来て、ぼんやり遠くを眺めていました……。フェンスの反対側には、夕日の沈む水平線と、いまではビルが建ち並んだ町の眺望が見おろせた。

1967年沖縄市生まれ。72年の祖国復帰時は5歳。特別な記憶はない。米軍施設は生まれたときから当たり前のように隣にあった。金網



光の匂ひーげたをとばす 1998 綿布に油彩 194×162cm

1998

「写真の断片を写して描くことで、キャンバスとの間に距離を保てるようになりました」



光の匂ひーみこもりVI 2004 キャンバスに油彩
162.2×227.2cm 撮影=柳場大

の破れ目から米軍のゴルフ場にはいつて遊んで、よく追いかけられた。道端に落ちていた小石や部品などを拾って集めるのが好きな少年だった。成績は優秀、とくに絵が好きだったわけではない。

宜野湾市の父の家で暮らすよう

になったのは、小学校卒業後。父は、画家の與那覇朝大。戦後、アメリカの将校相手に肖像で鍛え上げた描写力による琉球舞踊や風景をモチーフとする作品、肖像画の名手として知られる。

「父は、絵と同時に陶芸もやってい

ました。工房とアトリエを兼ねた自宅には、民謡歌手や新聞記者などが出入りして賑やかでした」。アトリエには、子どもは立ち入れない厳しい雰囲気があった。少年は、新聞記者になりたいとも思った。

中学からは、米軍の開放地に建っ

た新設校に通った。「海辺にぽつんとある校舎まで、砂利道が水平線へつづいて、後はなにもない荒野。解放されたような自由さと、空虚な感じがありました」。

沖縄市の市街地で育った幼年の閉ざされた視野から、水平線の見える空虚な風景への変化は、少年を絵画に向かわせた。1986年、その年に開学した沖縄県立芸大の一期生として入学。「専攻はちがいましたが、いつも夜遅くまで大学で制作



HOME-OK-07-03 2007 綿布にアクリル絵具、グワッシュ 72×70cm [*]

2007

「アメリカから帰って、自分が育った場所の地図を
転写した絵を描いてみようと思いました」

されていた日本画の平山英樹先生には、こつこつと描く絵描きの姿勢を学びました。父もそうですが」。

東京の美術館へ行ったとき、レンブラントのキューピッドを描いた絵に出会って、その肉付きのマチエールに魅せられたことや原雅幸の風景画の画肌も、油彩を究めてみようという動機になった。《烏からす》と題した卒業制作では、見おろした風景をモニタージュして精密に描写した。卒業後は島から出ようと思いい、筑波大学の大学院をめざした。

《ドアII》(1990)は、進学のために上京したものの浪人して、油絵にも行きづまった末に苦し紛れに鉛筆と黒色顔料で描いた。沖繩を離れてすぐに取り壊された宜野湾の実家のドア。いまでも敬愛するスペインの魔術的リアリズムの巨匠、アントニオ・ロペス・ガルシア(映画『マルメロの陽光』の画家)の影響が強い。筑波大では、自分の殻を破ろうと画面をバーナーで焼いたり、実際の風景のなかで、仲間と野外展を試みたりした。なかでも『美術手帖』などで

よなは・たいち 1967年沖縄県沖縄市生まれ。90年沖縄県立芸術大学美術工芸学部卒業。93年筑波大学大学院芸術研究科修了。おもな個展に98～2005・07年Oギャラリー(東京)、00・01・04年Oギャラリーeyes(大阪)、02・07年画廊沖縄(沖縄)、00・02・04年ギャラリー舫(東京)など。主なグループ展は、91～95年「美(チュラ)展」(目黒区美術館、東京ほか)、97・98年「現代日本美術展」(東京都美術館)、「第8回関口基金賞展」(優秀賞、柏市市民ギャラリー、千葉)、98年「第3回アート公募」(準大賞、SOKOギャラリー、東京。99年審査員賞。01年奨励賞)、00年「VOCA展2000」(上野の森美術館、東京)、01年NICAF2001TOKYO(東京国際フォーラム、東京)、03年「美術誕生」(八王子夢美術館、東京)、06年「スクープ・ニューヨーク」(636イレブン・アヴェニュー、ニューヨーク)、「WAR!T」(MBNスタジオ、フィラデルフィア)など。05～06年文化庁海外留学でアメリカ・フィラデルフィアに滞在。

宜野湾市の森川公園で。大学を卒業するまで過ごした町の思い出の場所のひとつ。公園は普天間飛行場に隣接している。晴れた日には慶良間諸島が望める町を見下ろすこの高台から、よく水平線を眺めていた[*]



紹介されだしたゲルハルト・リヒターのフォト・ペインティングは決定的だった。「抽象とか具象の境目がない世界が開かれていました。とくに雲と太陽を描いた作品やストロークで描いた作品に惹かれました」。

《光の匂ひ―げたをとばす》(1998)は、色彩をあえて意識的に使い出した時期の一作。トリミングした写真の断片を写実するという作業によって、外的要因を介することでキャンバスとの間に距離を保てるようになった。《光の匂ひ》とは、視覚だけではなく、五感で感じる世界を意味しているが、その後、空の絵は、雲と光そのものを中心に凝縮したり拡散させながら、ついにはホワイト・アウトへむかった。

《光の匂ひ―みこもりVI》(2004)は、空を見上げる視点から、ふたたび沖縄の原風景のなかにあった水面を俯瞰する視点に移した作品。「みこもりには、水籠り―思いを内に秘めるのと、見下ろすのと両方の意味をこめています」。

《HOME—OK-07-03》(2007)は、1年間のアメリカ留学後に制作した最近作。「アメリカで郊外の住宅地を散歩していたときに郷愁を覚えたのは、沖縄の米軍居留地の風景を思い出したからだ」と気づきました」。

帰国した画家は、かつて自分が暮らした沖縄の町の地図や航空写真に穴を開けて、型に絵具を押し出して、転写された地図の跡を水と絵具で染め流す方法で描いた。そこには、アメリカのなかで、郷里である島に強制的に仮構されたアメリカの風景を憶い出すように、「あるべき記憶と現実とのずれのなかにこそ、創造の源泉となる感情の湧く場所があるのではないか……」というおもしろいがある。(鳥瞰図)のネガは、水平線を見晴らして育った画家の記憶のHOMEにつながっている。

◎たかみ・あきひこ「美術評論家」
11月2日、沖縄県宜野湾市森川公園および画廊沖縄にて取材